

出土遺物

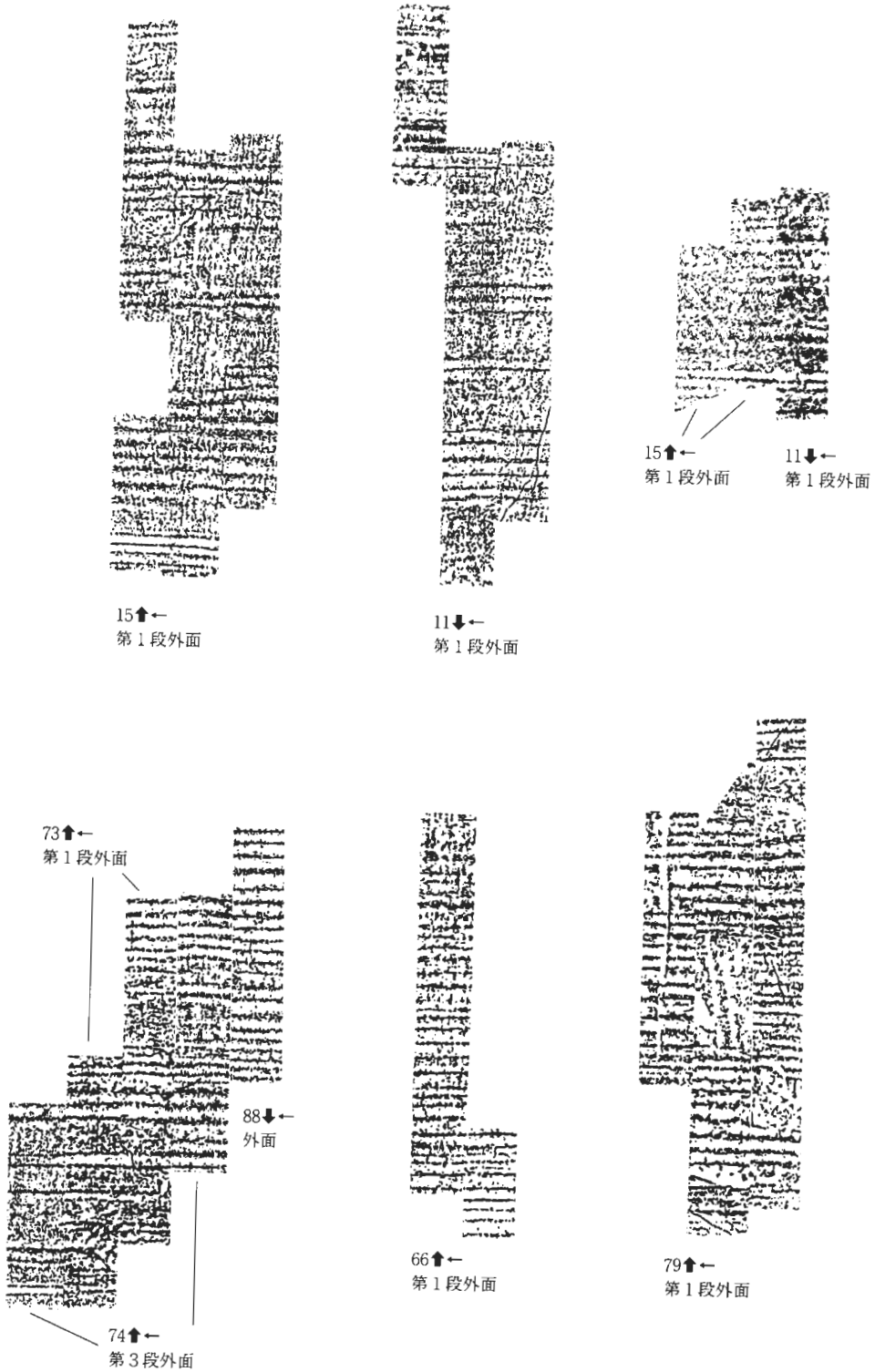


図12 ハケメパターン等倍拓影 (↑天地 ←ハケの方向)

#### (d) 口縁部の形状

普通円筒埴輪の口縁部は、最上段突帯より上部の形態で分類する(図13)。下段から口縁部が直立するもの(A類)と下段から直立し、段の中ほどから外反するもの(B類)、下段から口縁部まで外反気味に立ち上がるもの(C類)に大別され、さらに端部の形態で細分が可能である。

A類 下段から口縁部までほぼ直立するもの(5・20・78・83)。

B1類 最上段突帯より直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反するもの(29・31・32・65・73)。

B2類 最上段突帯から直線的に立ち上がり、口縁部が段の中ほどから外反するもの(6・9・24・25・28・30)。

C1類 最上段突帯から緩やかに外反するもの(22・23・26・71・80・81・82)。

C2類 最上段突帯から緩やかに外反した後、口縁部をさらに外反するもの(18・19・21・27・72・79)。

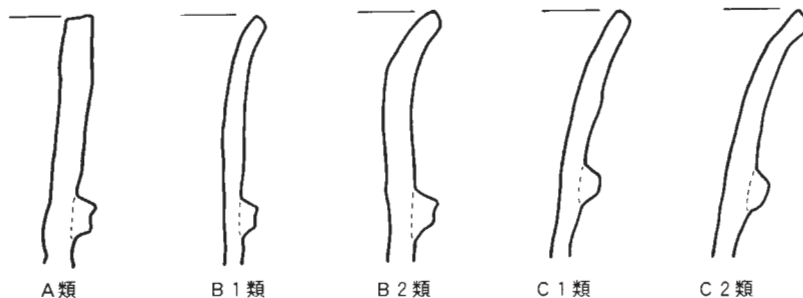


図13 口縁部分類 (1/4)

以上のように、口縁部を形態によって5つに分類したが、同類型においても細部の差異が存在する。A類には端部に面を作るものと丸くおさめるものがあり、C2類には、端部を屈曲させた後、内面をナデで調整するものと板状工具で調整するものの二者が認められる。これらの差異については細分の可能性も考えられるが、口縁部の資料が限られているため大別するにとどめた。

#### (e) 突帯の形状

突帯は上下面および側面に丁寧なナデが施され、断面形は上稜がやや突出した形状を呈する。ここでは突帯の形状から大きく2つに分類した(図14)。

突帯a：突帯幅が大きく、突出度が比較的高い突帯である。側縁に強いナデを施すことに



より断面M字形を呈する。突出度や断面形態から a1～a3類に細分した。

a1 断面M字形を呈し、大型で特に突出度の高いもの。

a2 断面M字形を呈し、中型のもの。

a3 断面M字形を呈するが、突出度が低く扁平なもの。

突帯 b：断面台形を呈し、突帯 a に比べて突帯幅、および突出度が小さいもの。

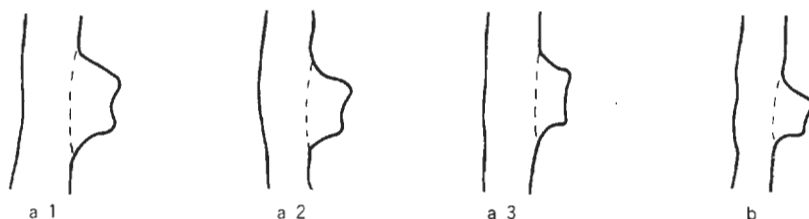


図14 突帯分類 (1/2)

#### (f) 透 孔

円形透孔と方形透孔の2種があるが、圧倒的に円形透孔が多い。円形透孔は外面調整が1次調整タテハケのみの個体、2次調整ヨコハケが施される個体双方に確認できるが、方形透孔は外面調整が1次調整タテハケのみの個体にしか認められない。円形透孔は穿孔面の痕跡から右上を起点として時計回りに穿孔されたと考えられる。

肩部直下において2条の突帯が近接している朝顔形埴輪には、狭い突帯間隔に規制され、小さな不整円形の透孔が穿たれている個体も確認できる (54)。

#### (g) 胎土・焼成

城山古墳出土の普通円筒埴輪・朝顔形埴輪については明確な黒斑を持つものが無く、焼きあがり硬質のものもあることから、窖窯を用いて焼成されたと判断できる。焼成は、堅緻で軽くたとえ金属質の感触を受けるものから、しまりが良くやや硬質なものや、焼成不良でしまりが悪く軟質なものまでが存在する。また、後述する形象埴輪は、断面が黒褐色を呈し、焼成不良なものが多く、普通円筒埴輪、朝顔形埴輪とは異なる胎土を持つ。

胎土中に見られる砂礫については、粒径が1cm大のチャート・砂岩が多量を占め、少量の花崗岩片を含むもの (1類) と、砂礫の組成が1類と異なり、粒径が1mm以下の鉱物を少量しか含まないもの (2類) の二者が存在する。

色調は、『新版標準土色帖』〔小山・竹原2000〕を使用した。外面、内面、断面の色調が5YR7/6、7/8、6/6、6/8で赤みのある橙色のもの、5YR7/3、7/4、6/3、6/4でい赤み

がかった橙色、7.5YR7/6、6/6、6/8の橙色、7.5YR7/3、7/4、6/4のにぶい橙色といった橙色を呈するものが大半を占める（A類）。また一方で、内外面が10YR6/3、6/4、7/4のにぶい黄褐色で、断面青灰～緑灰色を呈したものが一定量存在する（B類）。

胎土中の砂礫と色調の関係は概ねA類と1類（胎土 i）が、B類と2類（胎土 ii）が組み合う傾向があり、特に胎土 ii は断面色調や焼成からみても、きわだった特徴を示す。

## 2 形象埴輪（図版28・48）

形象埴輪のうち、2・4・5・6・10・11は第2トレンチ南西角付近の平坦面に転落した状態で出土した。その他に、ここでは若狭歴史民俗博物館所蔵資料（12）や、敦賀市郷土資料館所蔵の古川登氏による表採資料（1・3・7～9・13・14、〔古川1980・1987〕）を紹介する。

**鳥形埴輪（1～6）** 1は鳥形埴輪の脚部から基底部にかけての破片である。基底部と形象部との間の突帯直下に粘土紐積み上げの休止を認めることができる。突帯は当古墳出土の普通円筒埴輪と同様の2条凹線によって割り付けられているが、突出度は高く、やや下方を向く。形象部から突帯にかけて粘土を貼り付けて三股に開く鳥肢を表現しているが、残存状況が悪く鳥種は特定できない。調整については器面の摩滅が激しく不明である。2～6は胎土、色調から1と同一個体となる可能性が考えられる破片である。2・4は羽あるいは尾の一部である可能性が高い。3・5・6は体部に属する破片であろう。

**家形埴輪（7～14）** 少なくとも3個体の存在が想定される。7・9は破風板の破片であり、押縁を線刻で表現する。ともに破片資料のため、屋根の形態を復元することはできないが、少なくとも7は切妻造の屋根部片であると思われる。7では粘土をヘラ状工具で切り出すことによって梁材を立体的に表現している。9は屋根の下端部片で、粘土を充填し下部との接着を強化した痕跡を残す。8は棟木で、下面には屋根の内側に貼り付ける際に施された数回にわたるナデの痕跡が認められる。端面はやや扁平な不整円形を呈する。11・12は壁体部の破片である。11は壁体部の下端で、外面にはタテハケが観察される。12は両側面に透かし窓を有し、その下部には強いナデ調整が施される。平側、妻側の判別はできない。13・14は壁体部から基部にかけての破片で、いずれも裾廻り突帯が剝離した痕跡を残す。厚さや色調がそれぞれ異なり別個体と考えられる。10は剝離した裾廻り突帯である。突出度は小さく、やや下方を向く形状を呈する。

## 3 須恵器・その他の遺物 (図版27)

**須恵器** (図15-5) 第2トレンチ墳丘裾の平坦面で出土している。高杯の脚部片で、直径は約7cmに復元できる。端部近くに1条の凸線がめぐり、端部を丸くおさめる。脚部径の

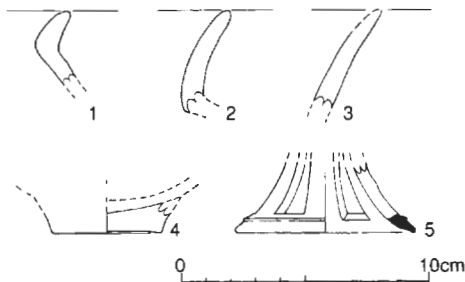


図15 土師器・須恵器実測図 (1/3)

ほぼ1/6が残存するのみだが、透かしはその配置から6孔と推定することができる。調整は内外面ともに回転ナデ。焼成は堅緻で、径1mm前後の長石をわずかに含む。内外面は灰色、断面はにぶい黄橙色を呈する。脚部の形状や6孔の透かしから初期須恵器の範疇で捉えられ、TK216型式〔田辺昭1966・1981〕の段階に併行するものと思われる。

**土師器** (図15-1～4) 1～3は口縁部、4は底部の破片で、いずれも第1トレンチから出土した。残存状況が悪く器種、時期ともに不明である。

**鉄鏃** (図16) 雁股鏃の破片で刃部が欠損している。全体的に銹化が著しく、銹び膨れも認められる。残存長4.1cm。鏃身部の断面は扁平な隅丸方形、茎は断面円形を呈する。第1トレンチの出土である。

**銭貨** (図17) いずれも墳丘の傾斜がやや緩やかな第2トレンチ前方部第1段斜面周辺から出土した。初鑄年が7世紀の唐銭「開元通寶」を除けば、他は「景德元寶」・「天(禧)通寶」・「天聖元寶」・「元豊通寶」・「政和通寶」など、初鑄年が11～12世紀に求められる北宋銭である。上記の鉄鏃はこれらに伴う時期のものである可能性が高い。

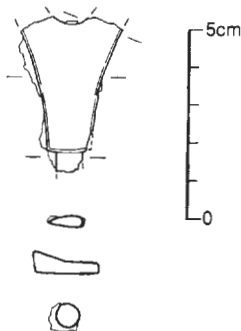


図16 鉄鏃実測図 (1/2)

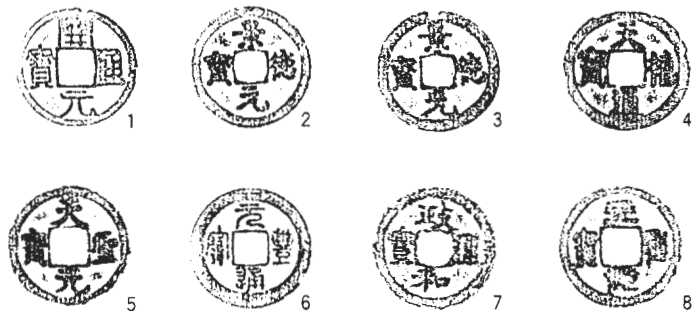


図17 銭貨拓影 (2/3)

## 五 結 語

### 1 城山古墳出土埴輪の評価

**埴輪の概要** 城山古墳出土の埴輪は普通円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪で構成される。外面調整にB種ヨコハケを施す個体が数多く存在し、いずれの個体にも器面に黒斑が認められず窖窯で焼成されたと考えられることから、川西編年Ⅳ期に比定される。これらの埴輪は、くびれ部から出土した須恵器とも時期的に大きな隔たりはないものと考えられる。

普通円筒埴輪には3条突帯4段と4条突帯5段の2種類の段構成が認められ、底部高や口縁部高には個体間で若干のばらつきがあるものの、突帯間隔は10cm前後にまとまっており、復元される器高にも大差はない。埴輪の形態としては比較的規格性が高いといえる。

一方、製作技術の面からは、外面1次調整タテハケで調整を終えるものと、2次調整としてB種ヨコハケが施されるものが存在する。透孔は円形のものがほとんどで、ごく少数方形のものが認められる。成形技法は、3条突帯4段構成、4条突帯5段構成ともに「小工程」を2回繰り返すものであるが、粘土紐積み上げの休止は4段構成では第3段、5段構成では第4段に認められ、成形時から段構成を意識して製作されていたと考えられる。突帯間隔の設定にはほぼすべての個体に凹線技法が、突帯の貼り付けには押圧技法が用いられた痕跡が観察される。このように、普通円筒埴輪では一部の属性に異なる傾向が認められるものの、全体的には形態・技法の両側面から一定程度の斉一性を読み取ることができる。

朝顔形埴輪は破片資料が多く全体像を明確に把握できないが、肩部まで突帯が均等に割り付けられるものと、肩部直下段の突帯間隔が狭いものの2つの型式が認められる。形象埴輪には鳥形埴輪、家形埴輪があるが、いずれも破片資料のため詳細は不明である。

以下、城山古墳の埴輪について出土量が豊富な普通円筒埴輪を中心に埴輪群の抽出を試み、派生する問題について言及する。

**埴輪群の抽出** 法量・調整・突帯・透孔・胎土などの属性の比較を行ない、共通する属性の組合せを持つ埴輪のまとまりとして埴輪群を抽出した。なお、埴輪群の多くは完形品や比較的残存状態の恵まれた底部を中心とする属性の比較を通して抽出しえたもので、口縁部や胴部など他の多数の資料については、埴輪群との対応関係を明確にしえたわけではな

表4 普通円筒埴輪群属性組合せ

普通円筒 埴輪群	外面調整		突帯				透孔		底部高			胎土	
	I	II	a1	a2	a3	b	円形	方形	1	2	3	i	ii
A群													
(A1群)													
(A2群)													
B群									—	—	—		
C群													

い。

城山古墳の埴輪は製作技法など様々な点が共通するものの、まず外面調整が1次調整タテハケのみのもの（外面調整Ⅰ）と2次調整にB種ヨコハケを施すもの（外面調整Ⅱ）の2つに大別される。この外面調整の差異は、多くの埴輪において断面M字形を呈する突帯aと、断面台形を呈し突出度が低い突帯bの差異とも対応し、外面調整Ⅰと突帯a（普通円筒埴輪A群・B群）、外面調整Ⅱと突帯b（普通円筒埴輪C群）が対応する。ただし、この外面調整と突帯の対応関係は全体的な傾向に過ぎず、こうした対応関係では捉えられない組合せも例外的に存在する。

朝顔形埴輪も肩部直下の突帯間隔の違いから大きく2つに分類できる（朝顔形埴輪A群・B群）が、これ以外の属性については不明な点が多く普通円筒埴輪との関係を窺い知ることができない。

以上の傾向に基づいて、各属性の組合せにより以下の分類を行った（表4・図18）。

普通円筒埴輪A群 外面調整はタテハケのもの（外面調整Ⅰ）で、突帯断面形がM字形を呈する突帯aと、円形透孔の組合せ（12・13・14・38・40・42・43・44・45・47・48・49・61・63・67・71・76・85の他多数）。

普通円筒埴輪B群 外面調整はタテハケのもの（外面調整Ⅰ）で、突帯断面形がM字を呈し突出度の高い突帯a1と、方形透孔の組合せ（6・20・29・78・83）。

普通円筒埴輪C群 外面調整はB種ヨコハケのもの（外面調整Ⅱ）で、突帯断面形が台形を呈し、突出度が低い突帯bと、円形透孔の組合せ（11・15・59・60・64・65・69・73・74・75の他多数）。

朝顔形埴輪A群 肩部まで突帯を均等に割り付けるもの（58）。

朝顔形埴輪B群 肩部直下の段が他段より狭いもの（54・92・93）。

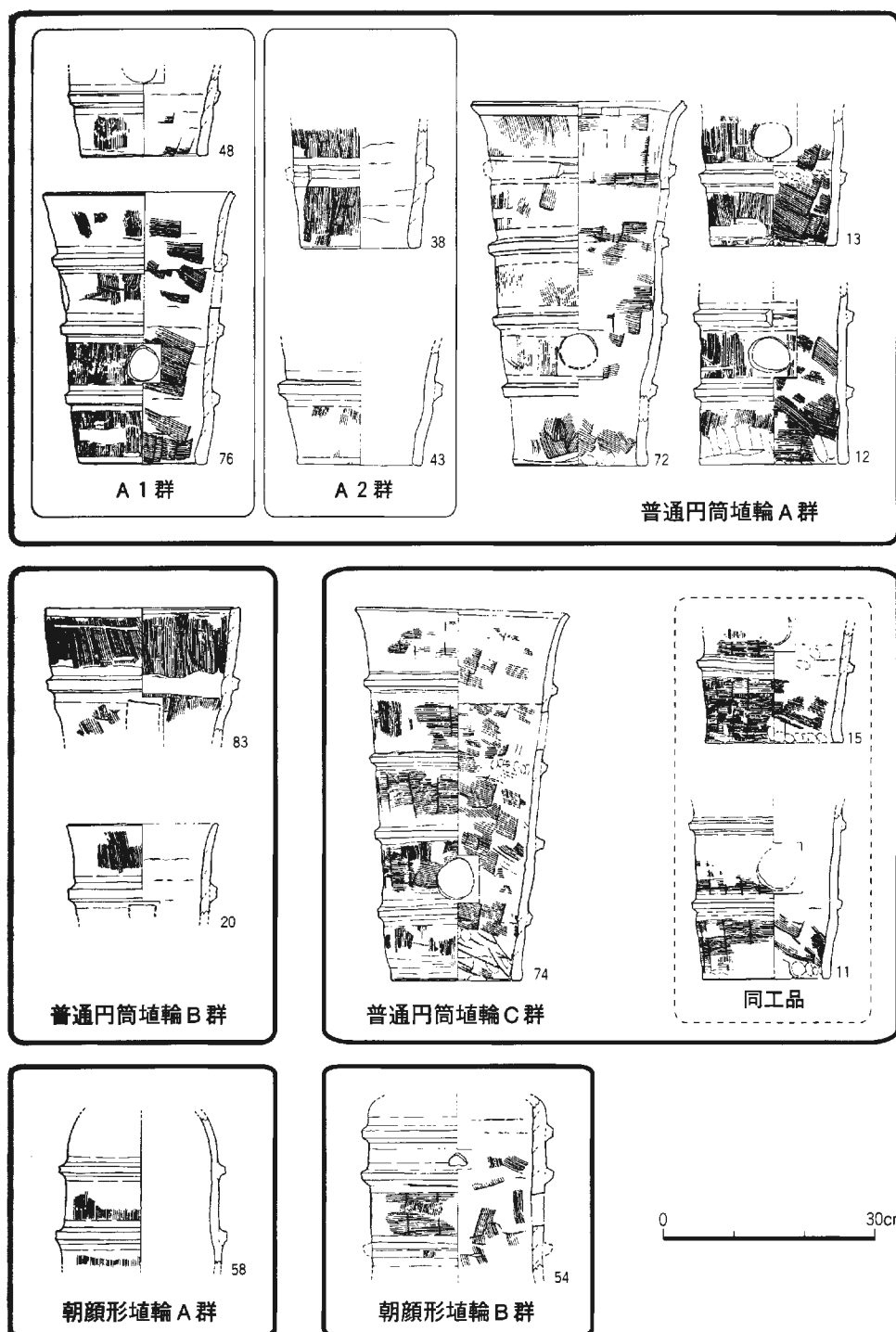


図18 円筒埴輪群分類図 (1/10)

普通円筒埴輪A群については、底部の残存状況が良好であるため底部高によって細分することができる。図9に挙げたように、底部高には9.0cm前後、10.0cm前後、11.0cm前後の大きく3つのピークがみられた。その中でも9.0cm前後の底部高と11.0cm前後の底部高には次に述べるように他の属性との対応関係が認められるため、ここではそれぞれを低い順に底部高1、底部高2、底部高3と分類し細分を試みる。なお、普通円筒埴輪A群には、全形の判明する資料が少ないため、口縁部との対応関係は不明である。

底部高が9.0cm前後と低い底部高1には、突帯の突出度が低く扁平な突帯a3が対応する（普通円筒埴輪A1群：42・47・48・49・67・71・76・85）。外面調整は、工具原体の条線が不明瞭なハケメを特徴とする。胎土は他の群が明確な特徴を見出せないのに対して、色調が黄褐色、断面青灰～緑灰色を呈し、胎土中の砂礫は大粒の砂礫を含まないという胎土iiをもつ。

底部高が11.0cm前後と高い底部高3には、突帯断面形がM字形を呈し突出度の高い突帯a1が対応し、底部は器壁が厚く直立気味に立ち上がるという形態的特徴を有する（普通円筒埴輪A2群：38・40・43・44・45）。なお底部高が10.0cm前後の底部高2については、A群の中で最も個体数が多いが、他の属性との関係は不明な点が多い。

普通円筒埴輪B群は、突帯a1で方形透孔を持つ一群で、口縁部が直立する口縁部A類と組み合わせる個体が多い。外面調整は1次調整タテハケしか見られない。なお、底部との対応関係は明らかでない。

普通円筒埴輪C群は、外面調整がB種ヨコハケ（外面調整Ⅱ）で突帯bと円形透孔の組合せを持ち、城山古墳出土の普通円筒埴輪の中では最も規格の整った一群である。個体数も多く、外面調整Ⅱa・Ⅱbを中心に細分の可能性も十分にあるが、資料が断片的であるためここでは一括しておく。この中には同工品と考えられるものが確認できている（11・15）。つまり、①底部高（11.0cm前後）、②外面B種ヨコハケの静止痕間隔が狭い、③基底部粘土帯接合、④突帯の形状、⑤胎土・色調などの多くの属性が共通し、また内面調整のハケメパターンが一致することから判断できる（図12）。また、類似するものの完全には一致しないハケメパターンが認められる11・15の外面調整については、同一木材から切り出された兄弟工具あるいは同一工具の使用面の違いも想定されるが、両者の外面2次調整の進行方向が逆であることから勘案すれば、無意識に同一工具の表裏が使い分けられたと考えるのが妥当であろう。この一方で、72・74・88のようにハケメパターンは一致するものの、その他の属性については一致しないという関係も認められる。

城山古墳出土円筒埴輪の多くは、普通円筒埴輪A群と普通円筒埴輪C群である。普通円筒埴輪A群については、A1群とA2群に細別できるが、その大多数の個体については細分できない。普通円筒埴輪A群は、細分が不可能な個体の中にも口縁部や突帯に多くの差異が存在するため、複数の工人グループのつながりを示す可能性がある。一方、細分できたA1群やA2群については、細部の属性が一致することから、より小さな工人や工人グループに対応する可能性が高い。また、普通円筒埴輪B群は、底部以下の属性が不明であるため、普通円筒埴輪A群との関係は不明な点が多い。一方で普通円筒埴輪C群は、突帯や外面調整、突帯間隔などから全体的に個体差が少ない。さらに、特徴が異なる個体間でハケメパターンが一致することや同工品が認められることから、普通円筒埴輪C群はまとまりのある工人グループとして評価できる。

朝顔形埴輪については、肩部以上の破片資料からは法量や口縁部突帯の成形技法などに個体差が存在するものの、全形を復元しうる資料が少ないため、属性間の関係を把握し得ない。確認できる範囲では、外面調整には1次調整のみのものと2次調整まで施すものがあり、胴部突帯には突帯断面形がM字形を呈し突出度の高い突帯a1と突帯断面形が台形を呈し突出度が低い突帯bの両者が存在する。現状では、肩部まで等間隔に割り付けられる朝顔形埴輪A群は外面1次タテハケ調整のみで、肩部直下の段が狭い朝顔形埴輪B群には2次調整B種ヨコハケが施された可能性が考えられる程度である。また、群として抽出できなかったが、朝顔形埴輪の中には器厚が薄く、胎土iiを持つ個体が存在する(53・55・56・57)。胎土以外の属性の関係が明らかではないが、胎土iiは普通円筒埴輪A1群と共通し、両者の関連性も考えられる。

形象埴輪は残存状況が悪く、普通円筒埴輪・朝顔形埴輪との関係について詳細は不明であるが、断面が黒褐色の色調を呈し焼成不良な個体が多い。

**城山古墳出土埴輪をめぐって** 城山古墳の普通円筒埴輪は形態、製作技術、ともに比較的まとまっており、一定の斉一性が認められた。その一方で、外面2次調整の有無や透孔の形状といった明確な差異も個体間に存在している。朝顔形埴輪においても、肩部直下の段の突帯間隔から2つの型式(朝顔形埴輪A群・B群)が認識できる。胴部の全段が等間隔に割り付けられる型式は、城山古墳の時期に通有の形態と言えるが、肩部直下段が狭い型式については、川西編年Ⅰ期の、口縁部の突帯間隔が狭い普通円筒埴輪に壺形埴輪を載せた形状に端を発する古い要素が採用されたものと理解できる。後者の類例は、川西編年Ⅱ期では奈良県マエ塚古墳、東大寺山古墳、赤土山古墳、大阪府萱振1号墳などの畿内地方所



在の古墳を中心に広い範囲で数多く出土しているが、Ⅳ期でも、京都府芭蕉塚古墳、上人ヶ平古墳群などのほか、山形県菅沢2号墳といった遠隔地においても認められる。

先に分類したように、普通円筒埴輪や朝顔形埴輪に複数の群が認められることから、複数の工人集団が城山古墳の埴輪生産に携わったと考えられる。しかし、当古墳の埴輪は概して各属性の組み合わせによって抽出された埴輪群においても、段の構成や透孔の配置、法量などの形態的特徴が共通しており、突帯成形時の押圧技法や突帯間隔設定技法などの技法的特徴も埴輪群を越えて同様に認められる。つまり、それぞれの技術水準の範囲内ではあるが、目標とする形態に一定の共通認識が維持され、同様の技法によって製作されたことから考えると、複数の工人集団が生産に関与していた状況においても、関係の疎密差はある程度想定されるものの、集団間で情報を交換、共有できるような比較的近い関係を有していたものと思われる。

周辺の古墳を見ると、城山古墳の前段階の首長墳と考えられている上之塚古墳では、川西編年Ⅲ期の埴輪が出土しており、B種ヨコハケが施された円筒埴輪の底部片が認められる〔中司1993〕。若狭において前方後円墳の嚆矢となった上之塚古墳では、その築造の契機とともに、埴輪にもB種ヨコハケが採用されたと考えられ、畿内地方からの強い影響が看取される。ただ、出土した埴輪が非常に少ないため全体を把握するには至らず、城山古墳の埴輪が上之塚古墳からの系譜を引くか否かについては不明である。一方、出土した須恵器から城山古墳より新しい時期に位置づけられる向山1号墳では、九州系の横穴式石室を埋葬施設に持ち、出土した埴輪は城山古墳の埴輪とは形態的にも技法的にも大きく異なるもので、尾張地域からの影響が指摘されている〔高橋1991〕。

城山古墳については、埋葬施設や副葬品が不明なものの、出土した埴輪からB種ヨコハケの採用だけでなく、竈窯焼成技術の導入も達成されており、上之塚古墳に引き続き畿内地方からの新しい技術導入が行われたと想定できるだろう。ただ、普通円筒埴輪では円形透孔の一群（普通円筒埴輪A群・C群）と方形透孔を含む一群（普通円筒埴輪B群）が、朝顔形埴輪では突帯間隔を肩部まで等間隔に割り付ける一群（朝顔形埴輪A群）と肩部直下段が狭い一群（朝顔形埴輪B群）が一古墳に共伴している状況から、畿内地方の中の単一地域からの影響と見るには様相は複雑であり、城山古墳の埴輪の製作においては在地、畿内、その他といった複数地域との関係を検討する必要があるだろう。

## 2 ま と め

### (a) 調査の概要

- ① 城山古墳は、南東に伸びる丘陵尾根線上に築かれた前方後円墳で、標高は後円部後方の墳丘裾で約127m、丘陵下の水田面からの比高は約84mを測る。
- ② 墳丘は、ほとんどが岩盤を含む地山の削りだしからなっていて、典型的な丘尾切断型の造成を示す。主軸は磁北に対し約44°西に振り、前方部は南東に向く（本文の説明では南）。前方部・後円部ともに2段築成であるが、墳丘の東側は急峻な斜面となっていて、ここでは第1段（下段）が造られなかった可能性が高い。規模は、墳長約63.0m、後円部径（復元）約38m・高さ約6.4m、前方部幅（推定）約31m・高さ約7.1mを測る。墳頂部平坦面は後円部の方が前方部より約0.5m高く、墳丘裾は後円部後方が前方部前面より約1.2m高い。
- ③ 葺石は山石を用い、第2段（上段）斜面にのみ施されているが、第2段斜面の東側、および第1段斜面にはない。
- ④ 埴輪列は第1段平坦面の全周（ただし、前方部東側は不明）に設置されており、墳頂部平坦面にも備わっていたと推測される。第1段平坦面の埴輪列は普通円筒埴輪と朝顔形埴輪からなるが、両者の配列パターンは不明である。設置方法は、後円部後方とくびれ部西側では不整形な溝状の掘方を設けて設置しているのに対し、くびれ部東側では掘方を設けず、土を敷いて、その上、あるいはその中に埴輪を配している。
- ⑤ くびれ部西側の埴輪列では、溝状の掘方は一部で途切れ、前方部側から伸びてきた掘方の北端（後円部側）に柱穴が1基穿たれている。したがって、この部分では、柱と北側の円筒埴輪との間に0.5mほどの隙間が開いていたものと推測される。この下の墳丘裾に平坦面があり、原位置は動いているものの、須恵器等が検出された点も注目される。また、くびれ部東側では、後円部から伸びてきた埴輪列が、前方部へと続かず、ほぼ直角に墳丘の外側（東側）へと伸びていて、それと並行する幅広の溝状遺構が検出された。両者ともに、墳丘への出入口の可能性が指摘できる〔和田1997〕。
- ⑥ 出土した遺物で古墳に直接関係するものには、埴輪（普通円筒・朝顔・家・鳥形）と須恵器（高杯）がある。普通円筒埴輪と朝顔形埴輪に関しては分析の結果を前節に記した。現状で可能な限りの分析を行い、一定の類型化を行ったもので、検出分については実態をそれなりに報告し、今後の編年や埴輪工人の分析に備えることができたかと思う。

- ⑦ 古墳の築造時期は、埴輪が窖窯焼成で、円筒埴輪の調整にBc種ヨコハケ〔川西1978、一瀬1988〕が用いられていることや、出土した須恵器の高杯がTK216型式〔田辺1966・1981〕相当と推定できること、あるいは墳形から、和田7期〔和田1987〕の古墳時代中期中葉（5世紀前葉）頃と推察される。

#### （b）北川流域の主要古墳の変遷と城山古墳

若狭地方の北川流域には、旧上中町を中心に数多くの古墳が築かれている。しかし、それらの実態については、斎藤 優氏の報告〔斎藤1970〕以来、あまり多くの情報を得ることはできなかったが、今回の福井県教育委員会による「若狭地方主要前方後円墳総合調査」や旧上中町教育委員会の近年の発掘によって、急速にその実態がわかってきた。ここで、第一章で述べた研究史を踏まえつつ、その主要な古墳の変遷を概観すると、以下の通り整理できるだろう（各古墳の報告書は第一章参照）。

**第1段階** 若狭での前期古墳としては、三方上中郡若狭町（旧三方町）の松尾谷古墳（前方後方墳、約40m、2段築成）が知られているのみである。最近、北川下流左岸の丘陵上にその候補となる前方後円墳（九花峰古墳—約49m、多田山上古墳—約35mなど）の存在が指摘されているが、現状では明確でない。

**第2段階** 北川中・上流に大型の古墳が築かれるようになるのは、古墳時代中期に入ってからで、脇袋支群の上之塚古墳（前方後円墳、墳長推定約100m、3段築成、盾形周濠、埴輪Ⅲ期）がその嚆矢にあたる。この古墳は極めて畿内的な中期様式の古墳で、規模は若狭最大を誇る。しかし、これに直続する古墳は明確ではなく（上下之森古墳などか）、以後の中期古墳としては、城山古墳と向山1号墳（前方後円墳、約49m、2段築成、埴輪Ⅳ期、ON46型式）といった丘陵上の中規模の前方後円墳が認められるのみである。

**第3段階** 脇袋支群で次に築かれたのは後期前葉の西塚古墳（前方後円墳、約74m、3段築成、盾形周濠、埴輪Ⅳ期、TK23型式）で、中塚古墳（前方後円墳、推定約72m、3段築成、周濠不祥、埴輪Ⅳ期）がこれに直続すると考えられているが、それでもって脇袋支群は終息する。一方、中塚古墳が築かれた頃には、新たな墓域に、日笠支群の白髭神社古墳（前方後円墳、約58m、2段築成か、盾形周濠、埴輪Ⅳ-V期）や天徳寺支群の十善ノ森古墳（前方後円墳、推定約68m、3段築成、埴輪Ⅴ期）などが築かれる。

日笠支群では、その後、後期中葉に上船塚古墳（前方後円墳、推定約77m、3段築成か、盾形周濠か、埴輪Ⅴ期）、下船塚古墳（前方後円墳、85m以上、3段築成か、盾形周濠、埴輪Ⅴ期）が築かれる。若狭では、この時期には北川流域以外でも、美浜町獅子塚古墳（前

■後円墳、約33m、埴輪Ⅴ期、MT15型式）、高浜町行峠古墳（前方後円墳、約34m、MT15型式）、同町二子山3号墳（前方後円墳、約26m、MT15型式）など小型前方後円墳が築かれる。古墳群の消長の激しいことが、この段階の特徴である。しかし、若狭の前方後円墳の築造は、この時期をもって終焉する。

■4段階 天徳寺支群に大型の円墳である丸山塚古墳（円墳、約50m、TK10型式）が築かれるのは、後期中葉後半のことで、後期後半には、前方後円墳はなくなり（首長墳の円墳化）、ほどなく横穴式石室をもつ群集墳が築かれるようになる。中期中葉の向山1号墳から西塚古墳、十善ノ森古墳、獅子塚古墳と続いた九州系の横穴式石室（竪穴系横口式石室を含む）から畿内系の横穴式石室に変化するもの、この丸山塚古墳からである。

■このように、北川流域の主要古墳を整理すると、各古墳は3基前後で、あるいは単独で、地域を違えて築造されているが、各支群の成立と終焉は、多少の遅速はあるにしても、全国的な古墳の築造動向の画期〔和田1994〕とはほぼ対応していることがわかる。若狭の古墳もヤマト王権の政治的動向と密接に関連しつつ築造されていたのであり、その動向も全体的な枠組みのなかで理解される必要があるだろう。

■そうしたなかで、墳長60mを超える大型前方後円墳の築造順序は、上之塚—城山—西塚—中塚—十善ノ森—上船塚—下船塚—（丸山塚）と変遷する〔中司1997参照〕。ただ、各支群の消長からみて、一つの系譜の有力首長が安定的に大首長の地位を保ちつづけたと言うわけではなさそうだ。各支群の階層差を含んだ系譜関係の整理は今後の課題として残されている。

## 参考文献

- 赤沢徳明ほか編 2003『滝見古墳群・大飯神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓群—近畿自動車道敦賀線建設事業に伴う発掘調査—』福井県埋蔵文化財調査報告第75集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 一瀬和夫 1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要Ⅴ』大阪府教育委員会
- 入江文敏・森川昌和 1981「獅子塚古墳」『探訪日本の古墳東日本編』有斐閣
- 入江文敏 1986「獅子塚古墳」「城山古墳」『福井県史』資料編13 福井県
- 上田三平 1920「西塚及び其付近の古墳」『若狭及び越前に於ける古代遺跡』（『福井県史蹟勝地調査報告』第1冊）福井県内務省

## 参考文献

- 江川隆・藤沢敦編 1991『菅沢2号墳』山形市教育委員会
- 置田雅昭 1977「初期の朝顔形埴輪」『考古学雑誌』第63巻第3号 日本考古学会
- 鐘方正樹 1997「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内Ⅰ—杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告—』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第1冊 奈良市教育委員会
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 小山正忠・竹原秀雄 2000『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所
- 斎藤 優 1970『若狭上中町の古墳』上中町教育委員会
- 高橋克壽 1991「若狭の埴輪と地域政権」『躍動する若狭の王者たち—前方後円墳の時代—』福井県立若狭歴史民俗資料館
- 高浜町教育委員会 1989『二子山3号墳発掘調査現地説明会資料』
- 高浜町教育委員会 1991『行峠古墳発掘調査現地説明会資料』
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園研究論集10 平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 田辺常博 1975『若狭きよしの古墳群』三方町教育委員会
- 辻川哲朗 1999「円筒埴輪の突帯設定技法の復元—埴輪受容形態検討の基礎作業として—」『埴輪論叢』第1号 埴輪検討会
- 辻川哲朗 2003「突帯—突帯間隔設定技法を中心として—」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 中司照世 1990「北陸」『古墳時代の研究』11（地域の古墳Ⅱ東日本） 雄山閣出版
- 中司照世 1993「上之塚古墳発掘調査概報」『若狭歴史だより』第3号 福井県立若狭歴史民俗資料館
- 中司照世 1995「基調報告 北近畿の首長とその動向」『シンポジウム 古代の北近畿—若狭湾岸の古代—資料集』福井県立若狭歴史民俗資料館
- 中司照世編 1997『若狭地方主要前方後円墳総合調査報告書』福井県教育委員会
- 永井久美男 2002『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院
- 西谷忠師 1994「電場・磁場観測による石造構造物探査」『文部省科学研究費補助金 重点領域研究「遺跡探査」平成6年度研究成果検討会議論文集』重点領域研究『遺跡探査法の開発研究』総括班
- 藤井幸司 2003「円筒埴輪製作技術の復元的研究—窖窯焼成導人以降を中心に—」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 古川 登 1980「福井嶺南地方の埴輪について」『六呂瀬山古墳群』福井県埋蔵文化財調査報告

第4集 福井県教育委員会

古川 登 1987「若狭・城山古墳の再検討」『福井考古学会会誌』第5号 福井考古学会

豊嶽貞義 2003「遺跡の位置と環境」『田鳥元山谷遺跡 一般国道162号道路改良工事業に伴う発掘調査』福井県埋蔵文化財調査報告第67集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号

和田晴吾 1994「古墳築造の諸段階と政治的階層構成」『ヤマト王権と交流の諸相』第5巻 名著出版

和田晴吾 1997「墓域と墳丘の出入口」『立命館大学考古学論集』1、同刊行会

表2 城山古墳周辺の古墳の参考文献

- (1) 三方町史編集委員会編 1990『三方町史』三方町
- (2) 近藤義郎編 1996『前方後円墳集成』中部編 山川出版社
- (3) 青池晴彦・赤澤徳明ほか編 1997『保谷墳墓群・矢竹古墳群』（『三方町文化財調査報告書』第15集）福井県三方郡三方町教育委員会
- (4) 斎藤 優 1970『若狭上中町の古墳』上中町教育委員会
- (5) 入江文敏 1980「城山古墳」『大鳥羽遺跡1』（『上中町文化財調査報告』第3集）福井県遠敷郡上中町教育委員会
- (6) 福井県編 1986『福井県史』資料編13 福井県
- (7) 古川 登 1987「若狭・城山古墳の再検討」『福井考古学会会誌』第5号 福井考古学会
- (8) 網谷克彦編 1991『躍動する若狭の王者たち—前方後円墳の時代—』福井県立若狭歴史民俗資料館
- (9) 中司照世編 1997『若狭地方主要前方後円墳総合調査報告書』福井県教育委員会
- (10) 堀田直志編 2005『大谷古墳』（『上中町文化財調査報告』第10集）上中町教育委員会
- (11) 中司照世 1993「上之塚古墳発掘調査概報」『若狭歴史だより』第3号 福井県立若狭歴史民俗資料館
- (12) 上田三平 1920「西塚及び其付近の古墳」『若狭及び越前に於ける古代遺跡』（『福井県史蹟勝地調査報告』第1冊）福井県内務省
- (13) 永江寿夫編 1992『上高野古墳』（『上中町文化財調査報告』第8集）福井県遠敷郡上中町教育委員会
- (14) 橋本英将ほか編 2004『市場古墳』（『上中町文化財調査報告』第9集）上中町教育委員会
- (15) 上中町教育委員会 1992『向山1号墳』

## 参 考 文 献

- (16) 中司照世 1992「若狭地方の新発見の前方後円墳」『若狭歴史民だより』創刊号 福井県立若狭歴史民俗資料館
- (17) 入江文敏・森川昌和 1978「十膳の森古墳の測量調査」『重要遺跡緊急確認調査報告(Ⅱ)』(『福井県埋蔵文化財調査報告』第3集) 福井県教育委員会
- (18) 永江寿夫編 1991『日笠地区圃場整備に伴う発掘調査報告』(『上中町文化財調査報告』第7集) 福井県遠敷郡上中町教育委員会
- (19) 小浜市史編纂委員会 1992『小浜市史』通史編上巻 小浜市役所
- (20) 中司照世 1994「遠敷古墳群分布調査報告」『紀要』第5号 福井県立若狭歴史民俗資料館
- (21) 御嶽貞義 2003「遺跡の位置と環境」『田烏元山谷遺跡 一般国道162号道路改良工事事業に伴う発掘調査』(『福井県埋蔵文化財調査報告』第67集) 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- (22) 福井県大飯郡大飯町文化財保護委員会・同志社大学考古学研究室 1958『大島半島の考古学概報』
- (23) 山口英一ほか編 1974『吉見古墳』(『若狭考古学研究会研究報告』4) 若狭考古学研究会

若狭・城山古墳発掘調査報告

表5 円筒埴輪観察表

1 トレンチ											
番号	法量 (cm)	突帯 間隔	残存高	内外面調整	透孔	突帯 形態	口縁部 分類	基底部 接合	色 調	焼成	備考
(H1)	底径: 22.8	9.6	24.3	外 タテハケ 内	○	a 2		S	外 5YR6/6 内 7.5YR7/6	やや良	3条4段 底部擦痕
(H2)	底径: 19.2		8.7	外 内				S	外 5YR7/8 内 5YR7/8	やや不良	底部擦痕
(H3)	底径: 19.2		6.3	外 内				Z	外 5YR6/8 内 5YR6/8	やや良	
(H4)	底径: 16.0 底高: 10.5		16.9	外 内		b		S	外 5YR6/8 内 5YR6/8	やや良	
5	口高: 8.4 口径: 25.3		11.6	外 タテハケ 内 タテハケ		a 2	A		外 5YR6/8 内 5YR6/8	やや不良	
6	口高: 9.4 口径: 26.6		13.3	外 タテハケ 内 タテハケ	□	a 1	B 2		外 10YR7/4 内 10YR7/4	やや良	
7		9.0	21.7	外 タテハケ 内 タテハケ		a 3			外 5YR6/8 内 5YR6/8	やや良	
8			13.3	外 タテハケ 内		a 2			外 7.5YR6/6 内 10YR6/4	やや良	
4 トレンチ											
9	口高: 9.5 口径: 28.0		15.7	外 最上: タテハケ 内 2: ナナメハケ	○	a 2	B 2		外 7.5YR7/8 内 5YR5/4		
10			11.9	外 タテハケ 内		a 2			外 7.5YR6/4 内 5YR6/6	良	
12 トレンチ											
(H1)	底高: 11.3 底径: 17.6	10.6	23.8	外 B種ヨコハケ 内 ナナメハケ	○	b		S	外 5YR6/6 内 5YR6/6	やや良	
(H2)	底高: 10.5 底径: 22.2	10.1	24.0	外 タテハケ 内 ヨコハケ ナナメハケ	○	a 2			外 5YR6/6 内 5YR6/6	良	突帯押圧 底部擦痕
(H3)	底高: 10.0 底径: 17.4		18.0	外 タテハケ 内 ナナメハケ		a 2			外 5YR7/6 内 5YR7/6	良	底部擦痕
(H4)	底高: 10.2 底径: 18.6	9.6	25.0	外 タテハケ 内 ナナメハケ	○	a 2			外 5YR7/8 内 5YR7/8	やや不良	突帯押圧 底部擦痕
(H5)	底高: 10.5~11.5 底径: 18.6		17.2	外 B種ヨコハケ 内 ヨコハケ ナナメハケ	○	b		S	外 5YR6/8 内 5YR6/8	良	
(H6)	底高: 9.8 底径: 18.0		10.0	外 タテハケ 内 ナナメハケ ヨコハケ					外 5YR6/4 内 5YR6/4	良	
(H7)			4.3	外 タテハケ 内 ヨコハケ					外 5YR6/4 内 5YR6/4	やや不良	
18	口高: 9.2 口径: 27.9		9.6	外 タテハケ 内 ヨコハケ			C 2		外 5YR7/6 内 5YR7/6	やや良	
19	口高: 9.2 口径: 30.8		11.5	外 ヨコハケ 内 ヨコハケ		a 2	C 2		外 5YR7/6 内 5YR7/6	やや良	
20	口高: 8.1 口径: 21.4		12.6	外 タテハケ 内	□	a 1	A		外 5YR6/6 内 5YR6/8	やや不良	
21	口高: 8.7 口径: 31.2		13.7	外 タテハケ 内 ヨコハケ	○		C 2		外 2.5YR7/8 内 2.5YR7/8	良	
22	口高: 8.2 口径: 26.4		12.0	外 内 ヨコハケ		b	C 1		外 10YR6/4 内 7.5YR6/6	やや良	
23	口高: 8.5 口径: 30.2		13.8	外 タテハケ 内	○	a 2	C 1		外 5YR6/6 内 7.5YR6/6	やや良	



円筒埴輪観察表

遺物番号	法量 (cm)	突帯 間隔	残存高	内外面調整	透孔	突帯 形態	口縁部 分類	基底部 接合	色 調	焼成	備考
24	口高: 8.7 口径: 28.0		23.2	外 タテハケ 内 ヨコハケ		a 1	B 2		外 5YR6/6 内 5YR6/6	やや良	
25	口高: 8.9 口径: 25		10.8	外 タテハケ 内		a 2	B 2		外 5YR6/6 内 5YR7/8	不良	
26	口高: 8.7 口径: 28.1		14.0	外 タテハケ 内	○	a 2	C 1		外 7.5YR6/4 内 10YR6/4	良	
27	口高: 8.7 口径: 30.1		12.8	外 ヨコハケ 内		a 2	C 2		外 5YR7/6 内 5YR6/6	やや良	
28	口高: 8.7 口径: 28.0		13.8	外 タテハケ 内			B 2		外 5YR6/6 内 5YR6/6	良	
29	口高: 8.1 口径: 24.8		10.8	外 タテハケ 内	□	a 1	B 1		外 5YR6/4 内 5YR6/4	やや良	
30	口高: 8.4 口径: 29.4	9.4	21.5	外 B種ヨコハケ 内 ナナメハケ		a 2	B 2		外 7.5YR7/6 内 7.5YR7/6	やや不良	
31	口高: 9.7 口径: 25.1		13.0	外 B種ヨコハケ 内		b	B 1		外 5YR7/8 内 5YR7/8	やや良	
32	口高: 10.6		12.3	外 B種ヨコハケ 内		b	B 1		外 5YR7/8 内 5YR6/8	やや不良	
33			15.9	外 タテハケ 内	○	a 2			外 7.5YR6/4 内 7.5YR6/4	やや良	
34		8.8	16.9	外 ヨコハケ 内	○				外 7.5YR7/6 内 7.5YR6/6	やや不良	
35			17.4	外 B種ヨコハケ 内 タテハケ		a 2			外 5YR6/6 内 5YR6/6	やや良	
36		9.0	13.8	外 内		a 2			外 5YR6/8 内 5YR6/8	やや不良	
37		9.2	17.7	外 タテハケ 内		a 2			外 5YR6/8 内 5YR6/8	やや良	
38	底高: 11.1 底径: 20.4		16.5	外 タテハケ 内		a 1			外 5YR6/4 内 5YR6/6	良	
39	底高: 10.5 底径: 21.5		14.3	外 タテハケ 内					外 5YR6/4 内 5YR6/4	やや良	底部擦痕
40	底高: 11.2 底径: 17.8		17.0	外 内		a 1			外 7.5YR6/6 内 7.5YR6/6	やや不良	
41	底高: 9.2 底径: 20.4		14.1	外 内					外 10YR6/4 内 10YR6/4	やや良	
42	底高: 9.1 底径: 20.0		13.0	外 内		a 3			外 7.5YR6/4 内 7.5YR5/6	やや良	
43	底高: 11.3 底径: 19.4		15.8	外 内		a 2			外 5YR6/8 内 5YR6/8	やや不良	底部擦痕
44	底高: 11.2 底径: 14.6		14.1	外 内		a 3			外 7.5YR6/6 内 7.5YR6/6	やや不良	
45	底高: 11.0 底径: 19.8		16.4	外 タテハケ 内		a 2			外 5YR6/8 内 5YR6/8	やや不良	
46	底高: 10.5 底径: 17.6		14.7	外 B種ヨコハケ 内		a 2			外 7.5YR6/6 内 7.5YR6/4	やや不良	
47	底高: 9.4 底径: 18.2		12.0	外 内		a 3			外 5YR6/8 内 5YR6/8	不良	
48	底高: 9.2 底径: 17.8		10.6	外 内	○	a 3		S	外 10YR6/6 内 10YR6/4	良	
49	底高: 9.2 底径: 20.4		10.7	外 内		a 3			外 7.5YR6/6 内 7.5YR6/6	良	
50 朝顔			7.3	外 内					外 5YR5/4 内 5YR6/6	やや不良	

若狭・城山古墳発掘調査報告

■ 器物番号	法量 (cm)	突帯 間隔	残存高	内外面調整	透孔	突帯 形態	口縁部 分類	基底部 接合	色 調	焼成	備考
51 朝顔			7.8	外 頸：タテハケ 内					外 5YR6/6 内 5YR6/6	やや良	
52 朝顔			5.8	外 内					外 5YR6/6 内 5YR5/6	やや不良	
53 朝顔			14.0	外 肩：タテハケ 内 頸：ヨコハケ					外 7.5YR7/8 内 7.5YR6/6	やや良	
54 朝顔		5.4	24.0	外 B種ヨコハケ 内 タテハケ	○/○	a 2			外 5YR6/6 内 5YR5/6	やや不良	
55 朝顔	口径： 35.1		9.3	外 口：タテハケ 内					外 10YR6/4 内 10YR6/4	やや良	
56 朝顔			5.2	外 口：タテハケ 内					外 10YR6/3 内 10YR6/4	やや不良	
57 朝顔			10.2	外 内					外 10YR7/4 内 10YR7/4	やや不良	
58 朝顔		9.9	20.8	外 タテハケ 内		a 2			外 7.5YR6/4 内 7.5YR6/4	やや不良	

■ 3 トレンチ

59 (H1)	底高： 10.0 底径： 20.2		12.8	外 タテハケ 内 ヨコハケ		b			外 5YR6/6 内 5YR6/6	良	突帯押圧 底部擦痕
60 (H2)	底高： 9.9 底径： 19.4	9.7	34.8	外 B種ヨコハケ 内 ヨコハケ	○	b		S	外 5YR7/8 内 5YR7/8	不良	4条5段
61 (H3)	底高： 10.1 底径： 18.0	8.5	24.2	外 タテハケ 内 ナデ	○	a 2		S	外 5YR7/8 内 5YR7/8	やや不良	底部擦痕
62 (H4)	底径： 16.6		5.8	外 タテハケ 内				Z	外 5YR6/6 内 5YR6/6	やや良	
63 (H5)	底高： 10.0 底径： 20.4	10.2	24.0	外 タテハケ 内 1：ヨコハケ 2：ナメハケ	○	a 2		S	外 5YR6/6 内 5YR6/6	良	突帯押圧 底部擦痕
64 (H6)			13.4	外 1：タテハケ 2：B種ヨコハケ 内 ヨコハケ	○	b			外 5YR6/6 内 5YR6/6	やや良	突帯押圧
65 (H7)	器高： 38.4 口高： 8.8 底高： 10.2 底径： 17.4	9.6	38.4	外 1：タテハケ 2～4：B種ヨコハケ 内	○	b	B 1	Z	外 5YR5/6 内 5YR5/6	やや不良	3条4段 突帯押圧 底部擦痕
66 (H8)	底高： 9.9 底径： 19.2		14.8	外 B種ヨコハケ 内 タテハケ	○	a 2		Z	外 5YR6/4 内 5YR6/4	良	
67 (H9)	底高： 10.1 底径： 18.7		12.7	外 タテハケ 内 ヨコハケ		a 3		S	外 5YR7/6 内 5YR7/6	やや不良	
68 (H10)	底径： 19.0		8.2	外 タテハケ 内 ヨコハケ					外 5YR6/6 内 5YR6/6	やや良	
69 (H11)	底高： 10.8 底径： 18.6		11.1	外 B種ヨコハケ 内 ナメハケ		b		S	外 5YR6/6 内 5YR6/6	やや良	
70 (H12) 朝顔	口径： 36.3		30.5	外 肩以上：タテハケ 内 肩以上：ヨコハケ					外 7.5YR7/6 内 7.5YR7/6	やや不良	刻み目
71 (H13)	器高： 38.4 口径： 23.9 底高： 8.6～9.3 底径： 18.8	9.5		外 内 ナメハケ	○	a 2 a 3	C 1	Z	外 5YR6/8 内 5YR6/8	やや不良	3条4段
72 (H14)	器高： 50.0 口径： 29.2 底高： 9.7 底径： 19.4	9.5～9.9		外 タテハケ 内 ヨコハケ ナメハケ	○	a 2	C 2		外 5YR6/6 内 5YR6/6	良	4条5段 突帯押圧

円筒埴輪観察表

遺物番号	法量 (cm)	突帯 間隔	残存高	内外面調整	透孔	突帯 形態	口縁部 分類	底部 接合	色 調	焼成	備考
73 (H15)	器高: 49.0 口径: 28.2 底高: 9.1 底径: 20.2	98~103		外 B種ヨコハケ 内 1~3: ナメハケ 4・5: ヨコハケ	○	b	B 1	Z	外 7.5YR6/6 内 7.5YR6/6	やや良	4条5段 突帯押圧 底部擦痕
74 (H16)	器高: 51.4 口径: 30.0 底高: 9.9~10.7 底径: 18.2	98~103		外 1: タテハケ 2~5: B種ヨコハケ 内 1: 板ナデ 2~5: ナメハケ	○	b	C 1	S	外 7.5YR6/6 内 7.5YR6/8	やや不良	4条5段 突帯押圧 底部擦痕
75 (H17)		9.7	28.2	外 B種ヨコハケ 内	○	b			外 7.5YR7/8 内 5YR6/8	不良	4条5段
76 (H19)	器高: 37.9 口高: 8.7 口径: 27.3 底高: 9.5 底径: 18.4	92~96		外 タテハケ 内 ヨコハケ ナメハケ	○	a 3	C 1	Z	外 5YR6/6 内 5YR6/6	堅緻	3条4段 底部擦痕
77 (H18) 朝顔	口径: 38.4 底高: 10.5~10.9 底径: 19.2	10.8	75.5	外 タテハケ 内 タテハケ	○	a 2		S	外 5YR6/8 内 5YR6/8	やや不良	
78	口高: 9.3		13.4	外 内 タテハケ	□	a 1	A		外 5YR6/8 内 5YR6/6	やや良	
79	口高: 9.0 口径: 26.9		14.2	外 B種ヨコハケ 内 ヨコハケ		b	C 2		外 5YR6/8 内 5YR6/8	やや良	
80	口高: 9.3 口径: 30.2		20.0	外 B種ヨコハケ 内 ヨコハケ		b	C 1		外 5YR6/8 内 5YR6/8	良	
81	口高: 9.3 口径: 29.3		16.0	外 B種ヨコハケ 内 ヨコハケ	○	b	C 1		外 5YR6/6 内 5YR6/6	良	
82	口高: 9.3 口径: 26.9		18.2	外 タテハケ 内 ナメハケ	○	b	C 1		外 7.5YR6/8 内 7.5YR6/8	良	
83	口高: 9.7 口径: 27.5		17.6	外 タテハケ 内 タテハケ	□	a 1	A		外 5YR6/8 内 5YR6/8	やや良	
84	底高: 11.0 底径: 22.0		10.9	外 内 ナメハケ		a 3			外 7.5YR7/8 内 5YR6/8	やや良	
85	底高: 9.2 底径: 20.4		11.9	外 タテハケ 内		a 3			外 7.5YR7/8 内 5YR6/8	やや不良	
86	底高: 9.6 底径: 20.6		17.4	外 1: タテハケ 2・3: B種ヨコハケ 内 ナメハケ	○	b			外 7.5YR7/8 内 5YR6/8	やや良	
87	底高: 11.0 底径: 18.0	9.5	23.3	外 B種ヨコハケ 内 底: 板ナデ 1・2: ナメハケ	○	a 3			外 5YR6/6 内 5YR6/6	やや不良	
88		9.6	17.7	外 B種ヨコハケ 内 ナメハケ ヨコハケ		b			外 5YR6/6 内 5YR6/6	やや良	
89 朝顔			8.3	外 タテハケ 内 ヨコハケ					外 5YR6/6 内 5YR6/4	やや良	
90 朝顔			6.8	外 内 ヨコハケ					外 5YR6/3 内 10YR6/3	やや良	刻み目
91 朝顔			11.5	外 肩: タテハケ 内					外 5YR6/4 内 5YR6/3	やや不良	
92 朝顔		5.6	14.5	外 肩: タテハケ 近接二条間: タテハケ 内		a 2			外 5YR6/6 内 5YR6/6	良	
93 朝顔		5.8	13.8	外 近接二条間: タテハケ 内		a 2			外 5YR6/6 内 5YR6/6	良	

報告書抄録

り が な	わかさ・しろやまこふんだいいちじはつくつちようさほうこく							
名	若狭・城山古墳第1次発掘調査報告							
書 名								
次								
リーズ名	立命館大学文学部学芸員課程研究報告							
リーズ番号	第5冊							
著 者 名	和田晴吾、高 正龍、田中元浩、宇野隆志、奈良拓弥、河原智也							
集 機 関	立命館大学文学部学芸員課程							
在 地	〒603-8577 京都府京都市北区等持院北町56-1 電話 075-465-1111(代) FAX 075-465-8188							
行年月日	2007年3月31日							
収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
山古墳	福井県三方上中郡若狭町大とほ・ながえ江	18501	32033	35° 29' 54"	135° 52' 0"	1993年 7月28日～ 9月16日	114㎡	「若狭地方 主要前方後 円墳総合調 査」の一環
種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
前方後円墳	古墳時代 中期	後円墳北側・ くびれ部西 側・くびれ部 東側・前方部 南側		普通円筒埴輪・朝顔形 埴輪・形象埴輪・須恵 器・土師器・鉄鏃・銭 貨		墳長約63m余りの前方後円 墳。 段築は後円部二段・前方部 二段と推定。 東側くびれ部に墳丘出入口 の可能性。 第1段平坦面に埴輪列。		